日本薬学会第2回全国学生ワークショップ報告書

水上　嗣海

愛知学院大学　薬学部　医療薬学科　生体有機化学

概要

公益社団法人日本薬学会が主催となって2012年8月に全国の薬科系大学から薬学生を集めて東京都府中市クロス・ウェーブ府中にて開催された。今回のワークショップでは前回の第1回全国学生ワークショップの課題であった3つに、新たに2つを加え、以下の5つの課題について1グループ(7〜8人)で、イラスト、KJ法、ワールドカフェ法などを用いてグループ討議を行い、意見交換を行った。

第一部「大学生活で一番印象に残っていること」
第二部「6年制薬学教育を通して成長したこと」
第三部「6年制薬学教育を通してもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」
第四部「6年制薬学教育課程を卒業する時にどのような能力を身につけていたいですか」
第五部「6年制薬学教育に望むこと、卒業後に取り組んでいきたいこと」

第一部「大学生活で一番印象に残っていること」について

グループの個人個人が大学生活で一番印象に残っていることをイラストにして自分が学生時代に何をしてきたかを発表した。発表の内容は薬学のことだけに拘らず、趣味、サークル活動などを通して行ってきた様々な内容で他大学の薬学生の大学生活が垣間見られるものであった。

第二部「6年制薬学教育を通して成長したこと」について

第二部では討議内容を「考える部分」「感じる部分」「行動などにアウトプットされる部分」の3つに分けてまとめた。考える部分では、やはり第一に薬学に対しての専門知識がついたという意見が多く、その上でSGDや実務実習を通して問題発見・解決能力が身についたという意見が多かった。感じる部分では、薬剤師としての責任の重さ、周りとの関わり合いの大切さに気付かされたという意見が上がった。中でも命を取り扱う職種だと強く認識し、責任感が高まったという意見には多くの同意を得た。行動などにアウトプットされる部分では、前述した考える部分・感じる部分から実際に行動として現れているもの、自分の中で変化したものについての意見が多く出た。薬剤師として重要視されているコミュニケーション能力をはじめ、社会生活を送る上で必要な能力を学んだとの意見が中心だった。6年制の薬学教育を通して得たものは薬剤師として必要な能力だけでなく社会生活を送るのに必要な能力も身についたという意見が出た。しかし、現時点での成長では満足できないものが多く、それを補うことや成長した部分をさらに伸ばしていけるかはこれから社会にでて自分がどう考え、行動するかによるところが大きいと考えた。6年制薬学教育という限られた時間の中でいかに自分に足りないところ、伸ばしたいところを見つけ、大学生活に留まらず社会に出ても自己研鑽できるかが重要だという意見にまとまった。

第二部のプロダクト

第三部「6年制薬学教育を通してもっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」について

第三部はワールドカフェ方式で行われた。このテーマでは、自身の知識・勉強不足を悔やむ意見や、大学や教育制度に対する問題点が多く抽出された。結論として、ⅡB班では、臨床現場で役立つ授業カリキュラムや経験を望む結果となった。今回の討論を通して、6年制薬学教育に不足している部分を明らかにするとともに、6年

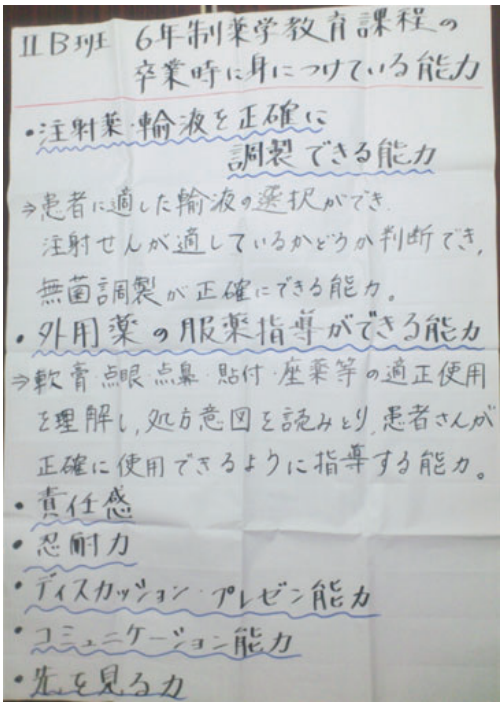
間という限られた時間の中で、「最低限修得しておかなければならないことは何か」を考え、問題点を絞ることができた。

- ①他の医療系学部との関わり
- ワークショップや症例検討会などを学生のうちから行うことにより、他職種の役割や知識の共有を行い、チーム医療の基礎を身につける。これらを早い段階で行っておくことで、臨床の現場で抵抗なくチーム医療を行うことができる。
- ②研究(臨床寄りの研究)
- 臨床に即した研究を行うことで、将来の業務にも役立ち、また、現場に出て臨床研究をする際にもその経験を活かすことができる。
- ③国試対策
- 国立大学では国試対策に割く時間が少なく、私立大学では多すぎる。研究と勉強のバランスを学生自身に選択させることで、「やらされている感」をなくし、自主性を持って取り組むことができる。
- ④輸液、TDM
- 輸液やTDMに関しては実習でその重要性を体感したが、重要度の割に、授業で取り扱う時間が少ない。もっとこれらの授業を増やし、より実践的な知識を大学で得ておくことで、臨床現場に役立てることができる。

第三部のプロダクト

第四部「６年制薬学教育課程を卒業する時にどのような能力を身につけていたいですか」について

ＩＩＢ班では、絶対に必要な能力は"知識・技能"ということで全員の意見がまとまった。そこで、具体的な能力として非経口薬の知識に焦点を当てた。非経口薬については、長期実務実習期間中に学ぶ機会があるが、実習先によってばらつきがあることや大学の授業での取り扱いが経口薬に比べて非経口薬は非常に少ないことが問題点として挙がった。実習前後で大学の授業として経口薬から非経口薬を取り扱う授業を増やすことが望まれるのではないかという意見も挙がった。



第五部「６年制薬学教育に望むこと、卒業後に取り組んでいきたいこと」について

６年制薬学教育に望むことを各自自由に述べながらホワイトボードにまとめた。第三部で議論した内容を基にしたものが多かった。その結果、私達の意見は大学・行政に望むもの並びに実習施設に望むものと大きく二つに分類できた。具体的には、講義時間を増やして欲しいものには、OTCやサプリメント、漢方薬などが挙がった。そして、薬剤師の中でも個人によって様々な進路が考えられるため、コア・カリキュラムをスリム化し、各個人がより深く学びたい内容を学べるように選択科目を増やすべきだという意見でまとまった。実習施設については実習を充実させるための意見として病院/薬局とも実習を同一箇所で終わらせてしまうのではなく、複数の施設を経験したらいいのではないかという意見が出た。処方薬は施設や医師によって偏りがあるため、幅広く処方薬について学ぶためだ。また病院/薬局にとらわれず、介護・福祉施設など実習施設自体の選択肢を増やしてみたらどうかという考えもあった。

[大学・行政に対して]
・臨床で使える知識、技術を知りたい(輸液、検査値、画像解析など)
・他の医療系学部との接点を持ちたい
・コア・カリキュラムの見直し(重複、無駄が多い)
・選択科目を増やして欲しい
[実習施設に対して]
・大学との連携の悪さを改善して欲しい
・指導薬剤師による教育内容の差を減らして欲しい
・複数の施設で実習を行いたい
・病院/薬局以外の施設でも実習を行いたい(介護施設、福祉施設)

第五部のプロダクト(1)

次に、卒業後に取り組んでいきたいことを各自自由に述べながらホワイトボードにまとめた。第三部及び第四部で議論した内容を基にしたものが多かった。また制度の過渡期である６年制薬学部二期生として４年制薬剤師と６年制薬剤師の関係を考えるものが多かった。現在、４年制から６年制薬学教育の変遷とともに薬剤師の職域、職能についても変化が生じてきている。今後薬剤師の参入が期待される領域には本当に活躍の場が存在するのか、どの程度のメリットがあるのか不透明な部分もある。その中で、薬剤師に対する社会のニーズの変化を敏感に読み取り先見性及び自ら薬剤師の活躍する場を作り出していく積極性が重要なのではないかと考えた。また例として、近年医療費の増大に伴い注目が集まっているセルフメディケーションに薬剤師が積極に参加していくべきだと考えた。他の先進国に見られるようにドラックストアでの薬剤師が患者に対して能動的な役割を果たすことで、より医療に貢献できるのではないかという案だ。ドラックストアは薬剤師がある意味で薬を"処方"することがで

きる場であるため、その"処方"の結果として近隣住民の健康や医療費に明確なメリットを示せれば薬剤師の存在感が高まるのではないかと考えた。

[自己研鑽]
- 知識、経験を増やす（検査値、画像解析など）

[繋がり]
- 現場ー企業ー行政の繋がりを大切にしたい
- 4年制薬剤師と6年制薬剤師の橋渡し役をしたい（温故知新）

[精神面]
- 様々な事に対して責任を持つ
- 先見性を持つ

第五部のプロダクト(2)

感想

今回のWSでは他大学との意見交換を通して薬学生の共通点や相違点を知ることが出来ました。6年制薬学教育において、似た様な問題点もあればそれに対する解決策・ヒントとなるものを得ることが出来たように思います。そんな中、自分と同じ様な志を持った人達と知り合えたことはかけがえのない経験であり、大切にしたいと思います。

私はドラッグストアに就職を決めましたが、そこでセルフメディケーションの普及を行うことで薬剤師の地位向上を目指しています。WSの内容にも度々出てきましたが薬剤師という職業はまだ世間に充分認知されているとは言えません。例えば、アメリカでは日本のような国民皆保険制度が存在しないため、国民には自然とセルフメディケーションの意識が浸透し、薬剤師の活躍の場が広がっています。一方、日本はセルフメディケーションに対する意識は低く、この事が医療費を増大させている要因の一つと考えられています。ですから、薬剤師の活躍の場を予防医学にまで広げることで社会に役立ちたいと思います。

最後に教育環境や今後の進路は違っても根底の志は同じであると再確認させてくれた同志、今回貴重な機会を与えてくださった愛知学院大学薬学部及び日本薬学会の皆様に心より深く感謝致します。